

『とはずがたり』における説話と現実

——「定業亦能転」と「まことの定業」——

土 門 政 和

嘉元二年九月五日、後深草院崩御四十九日佛事供養の記事が『とはずがたり』（後深草院二条の作で一四世紀初頭成立）にみえる。それは単なる供養の内容を述べたものではなく、説話をとり入れ後深草院を失なった悲しみを前面に押出している。それは二条の悲しい現実を直視する行為そのものであった。

説話の内容は二条にとって非常に馴染み深く印象深いものである。というのもその説話の中で重要な役割を果たす不動（常住院の絵不動）を、二条自身実見した記事が『とはずがたり』巻一にみえるからである。

証空が命に代りける本尊にや、絵像の不動、御前に掛けて（巻一）
とある記事から、それが確認できる。二条は馴染み深い説話を『とはずがたり』に取り入れ、現実を直視せんが為に利用している。その様相をさぐることにする。

二条が利用した説話は、いわゆる泣不動説話といって、『今昔物語集』巻十九ノ二十四にその原型がみえて以来、中世という時間をほぼ覆い尽くすように諸書に散見する説話でもある。

大略、以下のような話である。三井寺の智興内供が病いの床に就き最早助からなくなった。そこへ弟子の証空が師の命に代らんとする。阿倍晴明に祀り代えてもらおうと証空は苦しみにもだえる。

そこで絵像の不動に祈ると不動が証空の命を救ったという話である。

二条はこの説話のように奇跡が起きなかった現実を体験し（つまり二条は説話を現実世界に見ようとしたのである）、それに就いて感想を述べる。

まことの定業は、いかなることも叶はぬ御事なりけり（巻五）

「まことの定業」という表現は特徴的である。「定業」の語は死そのもの（寿命）の意味で用いられ逃れ難いものであると『宝物集』など中世の説話文学作品の中で盛んに用いられている。二条もまた同様の意味で用いたであろうことは、この表現が後深草院の死を体験したところであることから想像できよう。そして「まことの」と冠したのはその「定業」を自分で体験したことを示すためであろう。説話の世界とひきくらべて、現実の世界では「定業」は逃れ難いのだ、と体験に基づいた悲しい現実直視の姿勢が窺われるのである。

二条の泣き不動説話の利用の仕方はある意味で非常に意図的である。それは「定業」の語の利用の仕方が意図的である、とも言い換え得る。泣不動説話で巻一と巻五の連絡関係をつけることによって、二条の現実直視は一層際立つ効果がある。これは二条の意図であり、同時に立場でもある。

その連絡関係を確認しておこう。

巻一 巻五

(場面)	東二条院の御座	後深草院崩御
(結果)	延命	死
(表現)	定業亦能転	まことの定業
延命と死という違いは死という違いは「定業」の表現の違いと		

なつて現われている。二条は延命の意で「定業亦能転」の表現を用いているのである。この用法は二条の解釈に基くもので本来の用法からはかけはなれている。卷一では延命が叶つたのだから、つまり「まことの定業」ではなかったたので「定業亦能転」と用いたのであつて、それ以外の意図を考えることはできないように思われる。

「定業亦能転」の語は唐湛然述「法華文句記」卷十・下「釋普門品」にみえるが、そこで説かれているのは延命のことではない。若其機感厚定業亦能転。若過現縁淺微苦亦無徴。

とある如く、仏・菩薩に対する衆生の機が厚ければそれに感應して定業もまたよく転ずるのであり、その機が浅ければほんの少しの苦でも少しの徴はないことを説く。ここにみられるように「定業亦能転」は対句的表現の一部分なのであつて、それだけを取り出しての意味をなさない語であることが確認できよう。事実、『三宝感応要略録』、『法華直談抄』、『三国伝記』などではこの対句表現はきちんと継承されている。二条が何らかの形で参照したであろうと考えられる『宝物集』をみても、和文脈になつていないが、それもそれは踏襲されている。したがつて二条が延命の意味で「定業亦能転」の語だけを取り出し用いたことの意味は「とはずがたり」の性格の一端を考察する上で重要である。

後深草院の死の場面では「まことの定業」を、東二条院の延命の場面では「定業亦能転」を用いたのは意図的な操作であると考えられる。それは、泣き不動説話に描かれるもところの延命という結末を強く意識しながら用いたのであり、現実にあてはめ、現実を直視したのである。これは無意識ともいえる自然さで行われたところの、二条の精神的営みともいえる。

かかる意味で「とはずがたり」と説話との関係は深い。したがつて説話の内容を考慮するだけでは、「とはずがたり」における説話にはならない。「とはずがたり」の中に説話を取り入れた意図と手法をとらえることによって「とはずがたり」の性格を考察する一助としたい。